

2018年9月22日	高橋 正平	<i>Meroz Cursed</i> と「士師記」5章23節と27節
2018年9月22日	佐々木 和貴	ジェレミー・コリアーとそのインパクト
2018年3月22日	荒木 正純	箭川 修先生を偲ぶ会—特別講演 「民衆フランス語」とは何か？ —ファクシミリ版『荒地』が生起させる言語問題—
2018年3月22日	笹川 渉	箭川 修先生を偲ぶ会—シンポジウム 『パラダイス・ロスト』における共同体 —偽キリストとしてのサタンと国王
	福士 航	Aphra Behn のムーア人表象— <i>Abdelazer</i> を読む
	吉原 ゆかり	オフィーリアは変身する

Meroz Cursed と「士師記」5章23節と27節

高橋 正平

本発表はピューリタン長老派スティーヴン・マーシャル(Stephen Marshall)が1642年2月23日庶民院で行った説教「呪われたメロズ」に関するものである。

説教の発端は説教の前年1641年10月22日のアイルランド反乱である。説教は「アイルランドで困窮している人々」を助けるための説教であるが、説教時においてアイルランド反乱は4か月前の事件で、人々の関心はアイルランド反乱よりはむしろ説教前の1642年1月4日のチャールズ一世による国王反対派5人の逮捕未遂事件と王のヨークへの逃亡である。この事件によりピューリタンと王との対立が一層激化していったからである。マーシャルが本來說教すべきはアイルランド問題でなく、チャールズ一世体制であった。説教に挙げた「士師記」5章23節は『メロズをのろえ、激しくその民をのろえ、彼らはきて主を助けず、主を助けて勇士を攻めなかったからである』であるが、説教時のイングランドの社会情勢を考えると26節～27節の「ヤエルはくぎを手をかけ、右手に重い槌をとって、シセラを打ち、その頭を砕き、粉々にして、そのこめかみを打ち貫いた。シセラはヤエルの足もとにかがんで倒れ伏し、その足もとにかがんで倒れ、そのかがんだ所に倒れて死んだ」がはるかに説教時のイングランドにふさわしい節である。チャールズ一世打倒を叫ぶピューリタンにとってこの26節～27節は彼らの行動を鼓舞し、正当化する節になるからである。マーシャルによれば庶民院議員は「主の万軍の指導者及び長」として招集されているが、彼らは主に代わって「主の仕事」を行う人たちである。ピューリタン革命時にあって「主の仕事」とはイングランド社会改革であり、チャールズ一世体制打倒であり、それは聖戦を意味する。とすれ

ばマーシャルの説教はアイルランド救助のためであると言いながら実はイングランド国内の政争をも念頭に置いた説教と言える。マーシャルの説教は直接的にはアイルランド問題に端を発した説教であったが、マーシャルの本音は国内のチャールズ一世との対立であったはずである。ところがマーシャルはチャールズ一世を説教で取り上げることはしない。アイルランドで困窮しているプロテスタント救助に先を急げと叱咤激励しているだけである。なぜマーシャルはチャールズ一世を説教で扱わなかったのか。マーシャルは長老派ピューリタンであったが、王制打倒を叫ぶ独立派と異なり長老派は王との妥協を目指していた。マーシャルが説教でチャールズ一世を取り上げなかったのは彼が長老派であったからかもしれない。いずれにせよマーシャルの説教は説教時のイングランドの社会情勢を考慮すると当然論じられるべきだった問題を論じなかったという点で庶民院議員にとっては物足りなさを与える説教でもあった。

ジェレミー・コリアーとそのインパクト

佐々木 和貴

本発表では、1698年に英国国教会牧師ジェレミー・コリアー(Jeremy Collier)が出版した、王政復古期風習喜劇の不道德性を攻撃するパンフレット『英国の舞台の不道德と冒瀆管見』(*A Short View of the Immorality and Profaneness of the English Stage*)を取り上げた。そして出版直後から大きな反響を呼び、演劇関係者たちとの間でいわゆる「コリアー論争」(The Collier Stage Controversy)を巻き起こしたこのパンフレットが、当時の風習喜劇にどのような、あるいはどれほどのインパクトを与えたかについて考察した。

まずコリアーのパンフレットの時代背景とその特徴を概観し、それがこれまでの演劇批判文書のように、芝居という娯楽あるいは劇場という空間を、いかがわしく邪悪なものとして、その廃止を提唱しているのではなく、風儀改革という時代の風潮を踏まえて、演劇の果たすべき役割を明示し、それをどの様に改良すべきかを論点に据えている点を確認した。続いて、演劇関係者たちの反論・反応の具体例として、ウィリアム・コングリーヴ(William Congreve, 1670-1729)とジョン・デニス(John Dennis, 1658-1734)のものを取り上げた。そして前者が「検察官コリアー」に対して、自らの芝居の無罪を証明する「被告役」という、いわば守りの議論を終始強いられているのに対し、後者が英国人の国民精神を奮い立たせる娯楽として芝居が有用であると主張し、ナショナリズムに接続することで演劇を擁護していることを示した。さらに、コリアーの直接的な影響が窺える作品として、ジョージ・ファーকার(George Farquhar)の『双子のライバル』(*The Twin Rivals*, 1702年初演)と、リチャード・スティール(Richard Steele)の『嘘つきの恋人、または淑女達の友情』(*The Lying Lover: or, The Ladies Friendship*, 1703年初演)を取り上げた。そして、両者の芝居に共通する倫理的・道徳的要素が、コリアーの主張を受けて風習喜劇を変革しようとした、次世代の劇作家の試行錯誤のあとだったと考えられる可能性を指摘した。

最後に、王政復古期に大いに栄えた風習喜劇というジャンルの衰微と変容に、コリアーのパンフレットが与えたインパクトについて、私見を交えた考察を加え、発表のまとめとした。

参考文献

- Anthony, Sister Rose. *Jeremy Collier Stage Controversy 1698-1726*. Benjamin Blom, 1966.
- Collier, Jeremy. *A short view of the immorality, and profaneness of the English stage*(1698) with prefatory notes by Yuji Kaneko. Routledge/Thoemmes Press, 1996.
- Congreve, William. *Amendments of Mr. Collier's false and imperfect citations* (1698)with prefatory notes by Yuji Kaneko. Routledge/Thoemmes Press, 1996.
- Dennis, John. *The Critical Works of John Dennis*, 2vols. Ed. Edward Niles Hooker. The Johns Hopkins University.1939.
- Farquhar, George. *The Works of George Farquhar*. Ed. Shirley Strum Kenny. 2 vols. Oxford: Clarendon Press, 1988.
- Hume, Robert D. "Jeremy Collier and the Future of the London Theatre in 1698." *Studies in Philology* 96 (1999): 480-511.
- The London Stage 1660-1800: A Calendar of Plays, Entertainments and Afterpieces together with Casts, Box-Receipts and Contemporary Comment*. Part 1:1660-1700. Ed. William Van Lennep. Southern Illinois University Press, 1963.
- Steele, Sir Richard. *The Plays of Richard Steele*. Ed. Shirley S. Kenny. The Clarendon Press,1971.
- 佐々木 和貴 「王政復古から 18 世紀演劇へ：ジョン・デニス小論」 『十七世紀英文学研究 XV 十七世紀英文学と科学』 金星堂, 2010 年, 227- 47 頁.

「民衆フランス語」とは何か？ —ファクシミリ版『荒地』が生起させる言語問題—

荒木 正純

エリオットの『荒地』(1922年)の「III 火の説教」に、'demotic French'を話す「スミルナ(スマーナ)の商人」が話題となっている箇所がある。ファクシミリ版『荒地』(1971年)によると、'demotic'という語は、エリオットが 'abominable' としたのをパウンドが修正したもので、彼はまず 'his vile' とし、ついでそれを横棒で抹消し('his vile')、改めて右側に 'demotic' と記した。'abominable' と 'vile' は、英訳聖書にもほぼ同数使用され類語とみなせるが、「民衆の」を意味する 'demotic' はそうではない。この語は、「ロゼッタ・ストーン碑文」解読の過程で登場したきわめて新しい語であり、1922年は解読成功の百年目にあたり、合衆国の新聞各紙はその関連記事を掲載していた。

しかし、問題は、これらの形容詞に限定された 'French' が、一体、何を示唆していたかである。従来、日本では、「げすっぽい」(深瀬訳)とか「俗語まじり」(岩崎訳)のもの

解され、考察の対象とならなかった。事態は、英米でも同様であった。しかし、ここにパウンドが、当時、俗ラテン語から派生し、17世紀には純化が開始された「オイル語」を基にした北部フランスの「国語」に対し、かつてはトルバドゥールが使用した由緒あるものとはいえ、19世紀頃には、侮蔑された方言にすぎなくなった「プロヴァンス語」、ひいては「オック語」の研究をし、トルバドゥールの抒情詩の翻訳やそれを模した詩を制作・出版していたことをからめると、この「フランス語方言」が‘demotic French’の指示対象ではないかと思われる。プロヴァンスに生まれ育ち、オック語の再生に寄与したフレデリック・ミストラルが、1904年に代表作『ミレイオ』（1859年）をもってノーベル賞を受賞した。

この視座から『荒地』全体を通観すると、「リトアニア」「アイルランド」「近代ギリシャ」「インド」等の「国家」の「独立」（再生）と「国語」問題が示唆されていることに気づく。「民衆フランス語」はその典型であった。

主要参考文献：

T. S. Eliot, *The Waste Land: A Facsimile and Transcript of the Original Drafts including the Annotations of Ezra Pound*, ed. Valeri Eliot, 1971.

Peter Makin, *Provence & Pound*, 1978.

Petronius Selections from The Satyricon, ed. Gilbert Lawall, 1995

The Ezra Pound Encyclopedia, eds. Demetres P. Tryphonopoulos & Stephen J. Adams, 2005.

岩崎宗治訳『荒地』（岩波書店、2010年、2014年）

深瀬基寛『エリオット』（筑摩書店、1954年、1968年）

『パラダイス・ロスト』における共同体 ——偽キリストとしてのサタンと国王

笹川 渉

本発表の目的は、サタンを偽キリストとしてとらえること、そしてそれを論じるためにジョン・ミルトンの『パラダイス・ロスト』（1667）を同時代の王党派の文献と対照させる試みを行うことである。まず、笹川修氏の提示したルネ・ジラルの欲望の三角形の理論を援用した『パラダイス・ロスト』の分析を出発点とし、『パラダイス・ロスト』で描かれるサタン・「罪」・「死」が形成する共同体は、現実世界の墮落した教会を表していることを論じた。さらに、キリストの地位を欲望するサタンを偽のキリストとして考えることで、『パラダイス・ロスト』は、王党派が国王をキリストとして祀り上げる同時代の言説を批判している可能性があることを指摘した。

『パラダイス・ロスト』における「罪」と「死」の親子間で繰り返される性的関係と食人は、ミルトンが繰り返し批判するローマ・カトリック教会の実体変化を暗示し、ローマ教会

および内乱期以前に問題となったイングランド国教会の儀礼が、神との交流ではなく断絶を示していることを提示している。さらに、王党派の兵士で戦死したチャールズ・ルーカスを称賛したブロードサイド・バラッドでは、食人の比喻を用いて議会派を批判していたことは注目に値する。『パラダイス・ロスト』を王党派と議会派の論争の中に位置付けて考察するならば、ミルトンは王党派への反論として、カトリック的、ウィリアム・ロード的な聖餐式を食人として描き出し、血に飢えた王党派の表象を行った。

王党派が用いたレトリックを逆手に取るミルトンの手法は、サタンの表象に如実に表れている。箭川氏が指摘する欲望のメカニズムの論考では、サタンはキリストの地位を欲望しているという。このようなサタンとキリストの同一化は、国王とキリストを同一視する、スチュアート朝の王家を賛美する手法として氾濫していた王党派の言説を思わせるだろう。例えば、ウィリアム・カドモアの『祈りの歌』(1655)では、国王の帰還をキリストに重ねつつ、議会派を「罪」と「死」として提示している。同時代の文献の中に『パラダイス・ロスト』を布置することで、サタン・「罪」・「死」は、ミルトンにとって「反キリスト」と映った国王と王党派を意図したものと理解することができるのである。

主要参考文献

Cudmore, Daniel. *Euchodia. Or, A prayer-song; being sacred poems on the history of the birth and passion of our blessed Saviour, and several other choice texts of Scripture. In two parts.* London, 1655. British Library. *Early English Books Online*. Accessed 15 Mar. 2019 [Wing C7460].

“An elegie on the death of that most noble and heroick knight, Sir Charles Lucas governour of Colchester, and generall of the Essexian forces, who was murdered by the excellent rebell Fairfax, the day on which Colchester was surrendered, August 27. 1648.” London, 1648. British Library. *Early English Books Online*. Accessed 18 Feb. 2019 [Wing E32].

Gray, Catherine. “Tears of the Muses: 1649 and the Last Political Bodies of Royalist War Elegy.” *Gender Matters Discourses of Violence in Early Modern Literature and the Arts*, edited by Mara R. Wade, Rodopi, 2014, pp. 131–154.

Guibbory, Achsah. *Ceremony and Community from Herbert to Milton: Literature, Religion, and Cultural Conflict in Seventeenth-Century England.* Cambridge UP, 2006.

‘King Charles I. His imitation of Christ. Or The parallel lines of our Saviours and our kings sufferings, drawn through fourty six texts of Scripture, in an English and French poem.’ London, 1660. British Library. *Early English Books Online*. 18 Mar. 2019 [Wing W58].

King, John N. *Milton and Religious Controversy: Satire and Polemic in Paradise Lost.* Cambridge UP, 2001.

Lowenstein, David. “The Radical Religion Politics of *Paradise Lost*.” *A New Companion to Milton*, edited by Thomas N. Corns. Blackwell, 2017, pp. 376–390.

Milton, John. *Complete Prose Works of John Milton*, general editor, Don M. Wolfe, Yale UP, 1953–

82. 8 vols.

---. *De Doctrina Christiana*. Edited by John K. Hale and Donald Cullington. *The Complete Works of John Milton*, vol. 8, Oxford UP, 2012.

---. *Paradise Lost*. Edited by Alastair Fowler. 2nd ed. Longman, 2010.

ジラール, ルネ. 『欲望の現象学—文学の虚偽と真実』 古田幸男訳 法政大学出版局, 1971.
箭川修 「トライアングル・ヴァリエーションズ——墮ちる者達の心理」 『挑発するミルトン』 彩流社, 1995, 65–117 頁.

Aphra Behn のムーア人表象——*Abdelazer* を読む

福士 航

本発表では、Aphra Behn の *Abdelazer, or The Moor's Revenge. A Tragedy* (1676) における他者表象の分析を行った。この戯曲は、Thomas Dekker, *Lust's Dominion; or the Lascivious Queen* (c. 1606) を直接の種本とし、プロットをほぼそのまま借用する一方、キャラクターに関しては造形を一部変更しているものもある。また、William Shakespeare, *Othello* (c. 1602-3) からの台詞や場面の短い借用が複数有り、先行作品として Behn が *Othello* を意識していたことがテキストからはうかがえる。タイトル・キャラクターの Abdelazer の人物造形に関して、Behn は、正統な王権の継承者であるという自覚を持たせているが(1.1.162-181, 2.1.163-188)、この点は *Othello* の出自の高貴さの自覚(1.2.21-22)を拡大したとも理解できる。Behn が後に描く Oroonoko へとつながる「高貴な身分の奴隷」(royal slave)の人物造形を行った興味深い例と言える。

Anne Hermanson や Susie Thomas による先行研究では、人種差別的表象と女性蔑視的表象の関連を論じている。即ち、種本におけるムーア人 Eleazar は「人を騙し、狡猾で血に飢えた、残虐な悪党」というステレオタイプのムーア人悪漢の域を出ない一方、Abdelazer は上記のように高貴さの自覚から復讐の正当性を主張するため、人種差別的な要素が減少していると論じる。とくに Thomas はそれと対になるのが女性表象であり、人種差別的ステレオタイプを減じることと対応して女性蔑視的な描写が強化され、女王 Isabella がより極悪非道・怪物的(monstrous)な存在として描かれているという(22)。Hermanson は女王 Isabella には反カトリックの恐怖が書き込まれていると論じているが(77-78)、本発表では、こうした女性表象の理解には異議を唱えた。Isabella を、快楽主義的で過剰なセクシュアリティのゆえに「罰せられる」存在と解釈するのではなく、種本 *Lusts Dominion* と比較し、さらに Behn の作品群のなかにおいて Isabella を読み直してみると、決して否定的な存在として描かれているのではないのではないかと主張した。

Works Cited

Behn, Aphra. *Abdelazer; or The Moor's Revenge. The Works of Aphra Behn*. Ed.

- Janet Todd. London: William Pickering, 1996. Vol 5. 239-316.
- Hermanson, Anne. *The Horror Plays of the English Restoration*. Farnham. Ashgate, 2014.
- Thomas, Susie. "This Thing of Darkness I Acknowledge Mine: Aphra Behn's 'Abdelazer, or, The Moor's Revenge.'" *Restoration: Studies in English Literary Culture, 1660-1700*, vol. 22, no. 1, 1998, pp. 18-39. *JSTOR*, www.jstor.org/stable/43293955.
- Shakespeare, William. *Othello, the Moor of Venice*. The Oxford Shakespeare. Ed. Michael Neill. Oxford: Oxford UP, 2006.

オフィーリアは変身する

吉原 ゆかり

本発表では、日本におけるオフィーリアの変容について報告した。

愛のために狂気し、花に身を飾り水死するシェイクスピア『ハムレット』のオフィーリアに、崇高な自己犠牲の陰鬱美の極みを見出し感溺したのが、ミレイ『オフィーリア』(1851)に代表されるヴィクトリア朝の画家たちであった。

夏目漱石『草枕』(1906)で、反逆する魂である那美は、自分をミレイ的なオフィーリアの型に押しはめようとする語り手を、死美女に魅惑される凡庸なディレッタントであると嘲笑する。小林秀雄「おふえりあ遺文」(1931)で、オフィーリアの亡霊は、ハムレットに「尼寺へ行けだなんて、あなたこそ死んでしまえばいいのです」と反論し、大岡昇平「ハムレット日記」(最終版 1989 年)のオフィーリアは、ハムレットに消え失せろと命じられても消え失せない。

D. カラット(2007)はお岩、お菊、そして『リング』シリーズの貞子など、殺され水に投げ込まれ復讐のために蘇る死霊たちを”dead wet girls”と名付けた。オフィーリアはそのひとりとなり、「オフィーリア的なもの」に対し怒りの声をあげ、戦いを挑む。

八木教広『クレイモア』(2004)のオフィーリアは「血塗られた凶戦士」だ。宮崎駿『崖の上のポニョ』(2008)で、オフィーリアは全能の水の女神・グランママーレに変身する。枢やな『黒執事』のアニメーション・スピンオフ(2011)では、死神グレルは女装してオフィーリアを演じる。大塚英志原作の映画『劇場版 零ゼロ』(2014)では各所にミレイ『オフィーリア』が表れ、思春期の儂げな美を保ったまま水死する運命に定められているかに見える少女たちが、オフィーリアになぞらえられている。

極め付けは、NHK ビジューチューン、井上涼『オフィーリア・まだまだ』(2015)の、背泳ぎチャンピオン・オフィーリアだ。

ブクブクと沈む中で 思い出した 背泳ぎは得意 ずぶぬれドレスは重いけど まだまだ 溺れちゃ いられないのよ (中略) スイスイと進みつつも 思い出しちゃう

恋人の罵倒 残酷 「尼寺にでもゆけ」(中略) オフィーリア、まだまだ!

彼女は生き延びる。

これらオフィーリアたちは、オフィーリアでありつつ、「オフィーリア的なもの」を変容させる。

参考文献

- Dijkstra, Bram, *Idols of Perversity: Fantasies of Feminine Evil in Fin-de-Siècle Culture* (New York: Oxford University Press, 1986).
- Huang, Alexa, 'The Paradox of Female Agency: Ophelia and East Asian Sensibilities', in Kaara L. Peterson and Deanne Williams (eds), *The Afterlife of Ophelia* (New York: Palgrave Macmillan, 2012), 77–99.
- Inoue, Ryo, "Ophelia, madamada," Bijutune, www.nhk.or.jp/bijutune/.
- Kalat, David, *J-Horror: The Definitive Guide to The Ring, The Grudge and Beyond* (New York: Vertical, 2007).
- Shinohara, Toshiya, *Black Butler: Complete First Season* (Flower Mound: Funsnimation, 2012).
- Toboso, Yana, *Black Butler*, English edition (New York: Yen Press, 2014), vol. 3.
- Yagi, Norihiro, *Claymore* (San Francisco, VIZ Media, 2007), vols. 5–7.

【東京支部】

2018年7月18日	松田 幸子	<i>A Jovial Crew</i> とコモンウェルスとしての劇場
2018年11月10日	瀧澤 英子	「溶けるバター」の一考察 - フォルスタッフ像の表象として
2019年3月16日	本多 まりえ	『冬物語』における熊の表象

各支部活動報告発表要旨

【東京支部】

A Jovial Crew とコモンウェルスとしての劇場

松田 幸子

本発表では、Richard Brome による *A Jovial Crew* (初演：1641, 1642 年、出版：1652 年) における、劇場という〈コモンウェルス〉におけるベガーと役者のアナロジー的関係性を追っていくことで、この劇が内乱期直前の政治的混乱のなかで、劇場という場にある種の〈自由〉を見出そうとしていることを論じた。

Brome 自身、1652 年の出版時の献辞において自負するように、*A Jovial Crew* は 1642 年の劇場閉鎖の際、「最後に倒れた」(tumble last of all) 劇であるとされる。このことを裏付けるかのように、劇中ではベガーたちが旅役者として共同体(コモンウェルス)を形成し、仮面劇で *Utopia* を上演しようとする姿を通して、国家の形をアレゴリカルに示している。

Brome はこの時、旅役者としてのベガーたちの姿を、ある一面においては、理想的な牧歌空間におけるあらゆる労苦から解放された〈自由〉な存在として描き出そうとしている。*A Jovial Crew* は、ベガーと役者を等しく〈自由〉な存在としてたえず自己言及的に描くことで、内乱期直前の政治的混乱における劇場という場の意義を模索しようと試みた劇であるということができよう。

Bibliography

- Brome, Richard. *A Jovial Crew*. Ed. Tiffany Stern. London: Bloomsbury, 2014.
- Butler, Martin. *Theatre and Crisis*. Cambridge: Cambridge UP, 1984.
- Carroll, William C. *Fat King and Lean Beggar: Representations of Poverty in the Age of Shakespeare*. Ithaca: Cornell UP, 1996.
- Gaby, Rosemary. "Of Vagabonds and Commonwealth: Beggar's Bush, A Jovial Crew, and The Sisters." *Studies in English Literature, 1500-1900*. 34. 2 (1994): 401-424.
- Kinney Arthur F, ed. *Rogues, Vagabonds, & Sturdy Beggars: A New Gallery of Tudor and*

Early Stuart Rogue Literature Exposing the Lives, Times, and Cozening Tricks of the Elizabethan Underworld. Amherst: U of Massachusetts P, 1990.

Pugliatti, Paola. *Beggary and Theatre in Early Modern England*. Alderhot: Ashgate, 2003

Sanders, Julie. "Beggars' Commonwealth and the Pre-Civil War Stage: Suckling's *The Goblins*, Brome's *A Jovial Crew*, and Shirley's *The Sisters*." *The Modern Language Review* 97.1 (2002): 1-14.

---. *Caroline Drama: The Plays of Massinger, Ford, Shirley and Brome*. Plymouth: Northcote House, 1999.

溶けるバターの一考察 - フォルスタッフ像の表象として -

瀧澤 英子

本発表では、William Shakespeare による史劇 *Henry IV Part I*、同 *Part II*、及びに喜劇 *The Merry Wives of Windsor* に登場する Sir John Falstaff に焦点をあて、彼が「バター」の比喻で罵倒される台詞に着目し、その演劇的効果について見解を述べた。これら三つの作品における Falstaff の人物像にはそれぞれ相違があるにもかかわらず、彼を「バター」に喩える台詞は一貫してみられる。

「バター」、とりわけ「溶けるバター」のイメージリーで人物が語られることの意義を明らかにする為に、まず同時代文献の調査をとおして得られた類似表現の件数を示した上で実例を紹介しながら、「溶けるバター」が概して軟弱で頼りない存在を否定的に捉える際に用いられていたとの検証結果を示した。このような傾向を生み出した背景のひとつとして、「バター」が伝統的に乳業を主導してきた女性たちの姿と強く結びつけられてきたことにも触れた。「溶けるバター」を敢えて男性像の描写に用いることは、その人物の「女々しさ」、即ち男性性の欠如を暗にこする意図があったと位置づけた。

以上のような調査を裏づけに、Falstaff に向けられる誹謗の言葉として「バター」の語が果たしたであろう役割を考察した。Falstaff を「溶けるバター」で罵る言葉は、彼の肥満体を揶揄するものと捉えられがちであるが、文脈を見直すと、彼の偽証、契約の不履行、浪費が非難される場面において頻出する。これらはいずれも初近代において成人男性が社会的生活を確立する上での要件とみなされていたものに反する。実際に「溶けるバター」の比喻に言及しつつ、このような価値観の普及に努める説教や警句詩が同時代文献に複数存在する。このことから「バター」比喻は、Falstaff の男性性が危機にさらされる場面を描いた言葉として読むことができる。

発表の末尾では、Falstaff 本人が自身を「溶けるバター」に喩えて語る台詞が認められることにも注目し、その効果について一見解を示した。興味深いことに、同時代に書かれた戯曲作品において、自己言及としての「溶けるバター」は本人の惨めな現状を客体化し、他者

の憐憫、また時には侮蔑感情に訴えかることによって、結果的には何らかの利益を生み出す言葉として機能している。Hal 王子は、今しがた蔑まれながら舞台から退いた Falstaff に "Falstaff sweats to death / And lards the lean earth as he walks along." (II.ii.105-06 *Henry IV Part 1*) という形容を与えている。この台詞と照合しながら、「溶けるバター」として言い表される Falstaff には、恥辱をうける主体となり人々の誹謗中傷を喚起するという点においてこそ演劇的豊穡性が託されていると結論づけた。

主要参考文献

- Breitenberg, Mark. *Anxious Masculinity in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Bailey, Amanda. *Of Bondage: Debt, Property, and Personhood in Early Modern England*. Philadelphia: U of Pennsylvania P, 2013.
Early English Books Online.
- Headlam Wells, Robin. *Shakespeare On Masculinity*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.
- Hillman, Richard. *Self-Speaking in Medieval and Early Modern English Drama*. London: Palgrave Macmillan UK, 1997.
- Kerrigan, John. *Shakespeare's Binding Language*. Oxford: Oxford UP, 2016.
Literature Online.
- Rhodes, Neil. *Elizabethan Grotesque*. London: Routledge & Kegan Paul Books, 1980.
- Shepard, Alexandra. *Meanings of Manhood in Early Modern England*. Oxford: Oxford UP, 2006.
- Smith, Bruce R. *Shakespeare and Masculinity*. Oxford: Oxford UP, 2000.
- Stone, Lawrence. *The Family, Sex and Marriage in England, 1500-1800*. Harper & Row 1979.

『冬物語』における熊の表象

本多 まりえ

本発表では、『冬物語』における熊の表象に着目し、シェイクスピア時代の熊いじめに対する批判的見解、シェイクスピア自身の熊いじめ及び自然に対する見解、ひいては肉食主義についての見解を、以下四点から考察した。第一に、本作品で「熊 (bear)」という語が5回言及され、その中には オートリカスとの連想で言及される “bear-baiting” も含まれるということを確認した。アンティゴナスが登場しない材源の『パンドスト』では、アンティゴナスが熊に食べられ死ぬ場面はなく、シェイクスピアは熊に対し非常に関心があったと指摘した。第二に、当時一般に熊いじめが人気を博した一方で、一部のエリート層やピューリタンたちは、熊やその他動物へのいじめに不快感や残虐性を見出し、こうした娯楽を批判したと論じた。第三に、第4幕第4場のパーディタとポリクシニーズによる自然と人工に関する

る議論に着目し、この中でシェイクスピアはパーディタの意見に賛同しているようだと指摘し、そう考えると、アンティゴナスの熊による死は、熊いじめ或いは熊いじめのパロディーと呼べ、熊が人間をいじめる場面を滑稽に描くことで、シェイクスピアは熊いじめという人工的な娯楽に反対をしていたのではないかと提示し、ひいてはピューリタンやモアやモンテニューが示したような動物をむやみに殺してはいけないという動物愛護精神を示唆したのではないだろうかと指摘した。第四に、『冬物語』全般に見られる羊や鳩などの草食動物のメタファーや菜食主義を論じ、シェイクスピアは菜食主義を推奨したのではないかと論じた。最後に、こうした熊いじめへの反対や菜食主義の推奨という価値観はピューリタンの考えに共通するものがあり、シェイクスピアは作中でしばしばピューリタンを批判していたものの、彼らの考え方にはある程度共感していたのではないだろうかと結論付けた。

主要参考文献

- Bristol, Michael D. "In Search of the Bear: Spatiotemporal Form and the Heterogeneity of Economies in *The Winter's Tale*." *Shakespeare Quarterly*, vol. 42, no. 2, 1991, pp. 145-67.
- Clubb, Louise G. "The Tragicomic Bear." *Comparative Literature Studies*, vol. 9, no. 1, 1972, pp. 17-30.
- Gurr, Andrew. "The Bear, the Statue, and Hysteria in *The Winter's Tale*." *Shakespeare Quarterly*, vol. 34, no. 4, 1983, pp. 420-25.
- Hardman, C. B. "Theory, Form, and Meaning in Shakespeare's *The Winter's Tale*." *The Review of English Studies*, vol. 36, no. 142, 1985, pp. 228-35.
- Hunt, Maurice. "'Bearing Hence' Shakespeare's *The Winter's Tale*." *Studies in English Literature*, vol. 44, no. 2, 2004, pp. 333-46.
- Scott-Warren, Jason. "When Theaters Were Bear-Gardens; Or, What's at Stake in the Comedy of Humors." *Shakespeare Quarterly*, vol. 54, no. 1, 2003, pp. 63-82.
- Shakespeare, William. *The Winter's Tale*. Edited by John Pitcher, The Arden Shakespeare, 2010.
- . *The Winter's Tale: Evans Shakespeare Edition*. Edited by Lawrence F. Rhu, Cengage, 2012.
- Stubbes, Philip. *The Anatomy of Abuses*. 1583.
- Spurgeon, Caroline. *Shakespeare's Imagery and What It Tells Us*. Cambridge UP, 1935.
- Topsell, Edward. *Topsell's Histories of Beasts*. Edited by Malcolm South, Nelson-Hall, 1981.
- Watson, Robert N. "Protestant Animals: Puritan Sects and English Animal-Protection Sentiment, 1550-1650." *English Literary History*, vol. 81, no.4, 2014, pp. 1111-48.

【関西支部】

2018年7月14日	友田 奈津子	蚤のためにも鐘は鳴る —墓碑銘としてのジョン・ダンの祝婚歌
2018年12月15日	飯沼 万里子	「寝取られ男」を巡って —『狂えるオルランド』、 『千一夜物語』、『トロイラスとクレシダ』
2019年3月9日	丹羽 佐紀	アンティゴナスの苦悩 —『冬物語』に登場するもう一組の夫婦について—

各支部活動報告発表要旨

【関西支部】

蚤のためにも鐘は鳴る —墓碑銘としてのジョン・ダンの祝婚歌

友田 奈津子

初期近代、結婚の概念がキリスト教的倫理を収斂し、家族が近代社会を形成するうえで不可欠な構成要素としてのその意義を高められた。こうした結婚観の変化に対して、祝婚歌はルネサンスが復興させた多彩なギリシャ・ローマの文学ジャンルの中にあって、極めて政治的・宗教的な色の濃いジャンルとして当時の詩人たちに再発見され、再解釈され花開いた文学ジャンルである。

祝婚歌の英国における復興がいかになされたのか、その様子を確認するために、同時代の詩人たちに決定的な影響を及ぼしたエドモンド・スペンサーの祝婚歌において確認した。当時の詩学、スカリゲルの『詩学七卷』、プテナムの『英詩の技法』が解説するように、紀元前1世紀のローマの恋愛詩人カトゥルスが示した豊饒な自然描写と多少の猥雑さという古典文学の枠組みを援用しながらもスペンサーは、結婚によって結ばれる恋人たちを鳥に喩えるその手法によって、ジョフリー・チョーサーの『鳥たちの議会』のモチーフを祝婚歌に吸収する。古典の文学とアングロ・サクソンの文学の融合が新たな祝婚歌のモードを生み出した。

スペンサーに現れた祝婚歌を彩る多種多様な鳥たちの描写をジョン・ダンもまた二つの結婚のための祝婚歌で踏襲する。ダンは花嫁、花婿を鳥に喩え、その動物アレゴリーに政治的・宗教的意味付けをすることによって彼固有の物語を創造し、祝祭の日を記念する。この二つの結婚、宮廷を祝福で包んだ国家的業であった王女エリザベスとプファルツ選帝侯の結婚、そして宮廷をスキャンダルで賑やかすことになるサマセット伯とレイディ・フランシス・ハワードの結婚は1613年という年において時代の記憶に残る出来事であり、ダン以外にも錚々たる詩人たちがこの慶びの時をいかに巧く表すかを競い合った。本発表では時代の重大な節目を彩ったダンの祝婚歌が、時宜詩、称賛詩とその性質を拡大させながら時代の記念碑として提示される様を祝婚歌のジャンル分析を通して追った。

主要参考文献

- Bednarz, J. *Shakespeare and the Truth of Love: the Mystery of the Phoenix and Turtle*. N.p.: Palgrave Macmillan, 2014.
- Catullus, Gaius Valerius., et al. *Catullus, Tibullus, and Pervigilium Veneris*. W. Heinemann, 1988. Print.
- Chaucer, Geoffrey. *The Complete Poetry and Prose of Geoffrey Chaucer*. Ed. Mark Allen, and John H. Fisher. Boston: Wadsworth Pub, 2012. Print.

- Donne, John. *The Epithalamions, Anniversaries and Epicedes*. Ed. Wesley Milgate. Oxford: Clarendon, 1978.
- Dubrow, Heather. *A Happier Eden: The Politics of Marriage in the Stuart Epithalamium*. N.p.: Cornell UP, 1990. Print.
- Fowler, Alastair. *Silent Poetry: Essays in Numerological Analysis*. London: Routledge & K. Paul, 1970.
- Greene, Thomas M. "Spenser and the Epithalamic Convention." *Comparative Literature* 9.3 (1957): 215. Web.
- Lewis, C. S. *The Allegory of Love*. London: Oxford UP, 1936. Print.
- McClung, William A., and Rodney Simard. "Donne's Somerset Epithalamion and the Erotics of Criticism." *Huntington Library Quarterly* 50.2 (1987): 95-106. Web.
- Novarr, David. "Donne's 'Epithalamion Made At Lincolns Inn': Context And Date." *The Review of English Studies* VII.27 (1956): 250-63. Web.
- Puttenham, George. *The Art of English Poesy*. Ed. Frank Whigham and Wayne A. Rebhorn. Ithaca: Cornell UP, 2007. Print.
- Tufte, Virginia J. "'High Wedlock Then Be Honored': Rhetoric and the Epithalamium." *Pacific Coast Philology* 1 (1966): 32. Web.

「寝取られ男」を巡って — 『狂えるオルランド』、 『千一夜物語』、
『トロイラスとクレシダ』

飯沼 万里子

「寝取られ男」すなわち「自分の妻に裏切られる男」の一つの例として、まずアリオストの『狂えるオルランド』第28歌の第4スタンザから74スタンザにかけて語られる挿話を取り上げる。ここでは王は妃に、ローマの住民である男はその妻に裏切られる。王とローマの男は、女というものは夫一人では満足ができぬもので、必ず浮気をするものだという結論に達し、夫という夫が「寝取られ男」になるのなら、自分たちがそうなるのも当たり前だと悟り、妻たちのもとに帰っていく。このことが読者の笑いを誘うものとして語られる。

この挿話は『千一夜物語』の冒頭の部分の影響を受けているということが知られている。ここでは王とその弟がそれぞれの妃に裏切られる。そして女は自分の望むことはどういう手段をとってでも手に入れるということが磨神とその女を通して語られる。目撃者の王は宮廷に帰り王妃とその相手を殺してしまう。このあと毎夜新しい娘を迎えては殺すという形で復讐する王に物語を語る大臣の娘の話へと移っていく。この挿話には笑いはない。

この二つの典型的な「寝取られ男」の例に見合うかどうかはわからぬままに『トロイラスとクレシダ』を取り上げる。ここでは”true”であり続けるトロイラスと、”true”であろうとしつつも”false”な存在になるクレシダのやり取りを通して、いかにトロイラスが「寝取られ男」となっていくかが時間の経過をとともに語られるという点に注目したい。さらに悲劇になるうとしてなり切れないことを示す幕切れも重要であると考え。

参考文献

- Ariosto, Ludovico. *Orlando Furioso*. col commento di Gioacchino Paparelli, 2 vols, Milano: Biblioteca Universale Rizzoli, 1991.

Ariosto, Ludovico. *Orlando Furioso*. An English Translation with Introduction, Notes and Index by Allan Gilbert, 2 vols, New York: S. F. Vanni, 1954.

脇功訳『狂えるオルランド』名古屋：名古屋大学出版会、2001年。

豊島与志雄、渡辺一夫、佐藤正彰、岡部正孝訳『完訳千一夜物語』(全13冊)東京:岩波書店、1988年。

前嶋信次、池田修訳『アラビアン・ナイト』(全18巻)(東洋文庫)東京:平凡社1966年—1992年。

Shakespeare, William. *Troilus and Cressida*. Ed. David Bevington. Bloomsbury: Bolomsbury Arden Shakespeare, 1998.

三神勲訳『トロイラスとクレシダ』(シェイクスピア全集7)東京:筑摩書房、1972年。

アンティゴナスの苦悩 —『冬物語』に登場するもう一組の夫婦について—

丹羽 佐紀

『冬物語』(*The Winter's Tale*, 1610)には、シチリア王リオンティーズとその妃ハーマイオニーと並んでもう一組の夫婦が登場する。リオンティーズの忠実な廷臣の一人アンティゴナスと、その妻ポーリーナである。アンティゴナスは従来、熊に食べられる場面との関連において論じられることが多かったが、彼の存在を妻ポーリーナとの夫婦関係において捉える時、この二人は、王侯貴族たちがたどる再会の大団円への軌跡とは別の側面をこの劇において浮かび上がらせていることがわかる。本発表では、廷臣としての彼ら夫婦がこの劇においてどのように機能しているのか、上演当時の時代背景との関わりにおいて明らかにした。

主筋では、1幕2場でリオンティーズが妻の不貞を疑い嫉妬に狂うところから、様々な人物が巻き込まれていく。すなわち妻の貞節が二組の夫婦関係をめぐるキーワードの一つと言える。2幕1場でリオンティーズは、不貞を働いた妻を牢獄に連れていけとアンティゴナスとカミローに命令する。アンティゴナスは怒り狂う主君を必死で論そうと努め、妃に不貞の事実があれば、自分の3人の娘にその罪を贖わせ、子供の産めない身体にしてやると言う。主君に不貞の罪があれば、自分の娘たちの身体を傷つけてでもそれを償わせるという忠臣ぶりである。身体を損傷させ生殖機能を失わせるという行為への言及について Taylor は、同じような意味を持つ台詞として、『夏の夜の夢』1幕1場におけるアテネの公爵シーシェーアの言葉を引き合いに出し、父親が娘を「そのままにしておくのもこわすのも[彼の]意のまま」(‘within his power / To leave the figure, or disfigure it’ (1.1.50-51)) という台詞は身体切断のイメージを想起させると捉える。(104) また Peterson は、初期近代イングランドにおいて、女性のヒステリー発作と身体的症状との関係という観点から子宮が注目されたことに言及している。(37-106) 女性の振る舞いが子宮と密接に関連すると捉えられた背景を考え

れば、逆に不貞を制するために子宮にダメージを与えるという論理は説得力を持つ。

ところがリオンティーズは 2 幕 3 場で、生まれたばかりの子を不義の子だと思い込み、遠くの地に捨てるようアンティゴナスに命じる。それはアンティゴナスも同様に自分の 3 人の娘から引き離され、おそらくは二度と会えないことを意味する。これは、二度と子供に会えないという全く同じ境遇を受け入れることによりその忠義を証明せよと求める命令でもあり、アンティゴナスは命令に従うが、彼の忠臣ぶりはなぜか報いられない。奇妙なことに、アポロの神託を聞いたあと、リオンティーズの後悔の台詞の中にアンティゴナスへの詫びはなく、彼を呼び戻そうとする話も出て来ない。彼は忠勤を行動で示しながらも忘れられた存在なのである。

ポーリーナも、愛する者に会えない「時」の長い経過を味わう。5 幕 3 場で彼女は、「自分は二度と帰るあてのない夫を命果てるまで悼む」(I, an old turtle, / Will wing me to some withered bough, and there / My mate, that's never to be found again, / Lament till I am lost. (5.3.132-35)) と言う。ところが彼女の夫への一途な愛は、そのすぐ後にリオンティーズに再婚を促されることで台無しにされる。ここで夫に対するポーリーナの貞節はなぜ破ることが求められるのかという問題が生じる。実際、リオンティーズに再婚を勧められた後、それを感謝して受け入れるポーリーナの台詞はなく、彼女はリオンティーズに何も答えない。これらの点に注目すると、リオンティーズによる再婚への促しを、主君による家来の縁結びと単純に解釈できないことがわかる。

Wabuda は、1524 年にアントワープで印刷された Juan Luis Vives の *De institutione foeminae Christianae* (translated by Richard Hyrde in 1529? as *A very frutefull and pleasant boke called the Instruction of a Christian woman*) という著書が、イングランドでも当時広く読まれ、特に上流階級の女性たちの指南書としての役割を果たした旨を紹介しているが、その中ではキリスト教徒の妻が果たすべき、夫への貞節と従順の大切さが強調される。(116) Aughterson 編の *Renaissance Woman* には、Vives の著書から 'Of Second Marriage' として 2 度目の結婚に言及した箇所の抜粋があり、それによると彼は 2 度目の結婚を強い口調で非難している。(74) リオンティーズによるポーリーナへの再婚の勧めは、Vives が説くところの、上流階級のキリスト教徒の未亡人がとるべき道とは明らかに反対の推奨である。Vives の書物が 9 回も版を重ねるほど読まれたことから裏付けられるように、少なくとも当時の上流階級の女性にとっては、政略結婚や王位継承の目的を除き、積極的に再婚が推奨されたとは考えにくい。ポーリーナの無言の反応は、妻としての貞節を守り抜こうとする彼女の抵抗とも解釈できる。実際、5 幕 1 場でダイオンとクリオミニーズが、リオンティーズは再婚した方が良いと話し合っていると、ポーリーナはきっぱり反論する。ここには、ハーマイオニーの存在を忘れてはならないとする主人への忠義と同時に、亡き配偶者を忘れることへの彼女自身の抵抗感が読みとれる。

この夫婦の立場を踏まえて劇の最後の場面に注目すると、夫への貞節を守ってきたポーリーナの一途さを、かつて誰よりも不貞に腹を立てた王自らが、打ち破ることを積極的に推

奨するという一連の矛盾した言動に、王侯たちのハッピーエンディングのために忘れられる廷臣夫婦の貞節という構図が浮かび上がる。この背景は二つの点から解釈できる。一つは、ジェイムズ 1 世による王権の誇示と、そのために見過ごされる周縁の人々の反映という捉え方である。Orgel は、『冬物語』における王権の回復は「忘却」(‘forgetfulness’) もしくは「記憶の遮断」(‘a lapse of memory’) によって成り立っていること、そしてリオンティーズに集約される王権とは、まさにジェイムズ 1 世が何より重視したものであると述べる。(34-35) 王権神授説を唱えたジェイムズ 1 世にとって、王権維持は自らの政策を正当化するための最重要課題であった。そのためには廷臣夫婦の苦悩も免責事項となる。もう一つの捉え方として、エリザベス 1 世時代に築かれた帝国へのノスタルジアという過去へ向かう視点が考えられる。エリザベス 1 世時代における王権のイメージが上演当時の人々の記憶に理想として留まったとすれば、王権維持のために別の部分が忘れられることへの寛容も期待できたと言える。

このように、廷臣アンティゴナスとその妻ポーリーナは、王権維持のために忘れられる部分をこの劇において逆説的に浮かび上がらせるべく機能している。しかし観客は、ポーリーナが様々な場面で何気なく口にする夫の存在により、彼女が最初から最後まで夫を忘れていないことに気がつく。それは彼女もまた、ハーマイオニーと同じように夫への貞節を守り続けたからであり、それはもう少し時代に即した見方をすれば、王権と民意のずれを象徴しているとも言える。

主要参考文献

- Aughterson, Kate, ed. *Renaissance Woman: A Sourcebook Constructions of Femininity in England*. London and New York: Routledge, 1995.
- Black, Jeremy. *English Nationalism: A Short History*. London: Hurst & Company, 2018.
- Bullough, Geoffrey, ed. *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*. Vol. Viii. London: Routledge & Kegan Paul, 1975.
- Helgerson, Richard. *Forms of Nationhood: The Elizabethan Writing of England*. Chicago: The University of Chicago Press, 1992.
- MacFarlane, Alan. *Witchcraft in Tudor and Stuart England: A Regional and Comparative Study*. Illinois: Waveland Press, Inc., 1970.
- Orgel, Stephen. ‘Shakespeare and the Art of Forgetting.’ Michele Marrapodi ed. *Shakespeare and Renaissance Literary Theories: Anglo-Italian Transactions*. Farnham: Ashgate, 2011.25-35.
- Peterson, Kaara L. *Popular Medicine, Hysterical Disease, and Social Controversy in Shakespeare’s England*. Farnham: Ashgate, 2010.
- Pitcher, John. Introduction. *The Winter’s Tale*. By William Shakespeare. London: Bloomsbury, 2010. 1-135.
- Shakespeare, William. *A Midsummer Night’s Dream*. Ed. R. A. Forkes. Cambridge: CUP, 2003.

- *The Winter's Tale*. Ed. John Pitcher. London: Bloomsbury, 2010.
- *The Winter's Tale*. Eds. Susan Snyder and Deborah T. Curren-Aquino. Cambridge: CUP, 2007.
- Snyder, Susan, and Deborah T. Curren-Aquino. Introduction. *The Winter's Tale*. By William Shakespeare. Cambridge: CUP, 2007. 1-72.
- Taylor, Mark. *Shakespeare's Darker Purpose: A Question of Incest*. New York: AMS Press, Inc., 1982.
- Vaught, Jennifer C. *Carnival and Literature in Early Modern England*. Farnham: Ashgate, 2012.
- Vives, Juan Luis. *Instruction of a Christian Woman*. Trans. Richard Hyrde. 1540. *Renaissance Woman: Construction of Femininity in England*. Ed. Kate Aughterson. London: Routledge, 1995. 69-74.
- Wabuda, Susan. 'Sanctified by the believing spouse: women, men and the marital yoke in the early Reformation.' Peter Marshall and Alec Ryrie eds. *The Beginnings of English Protestantism*. Cambridge: CUP, 2002. 111-128.
- Wells, Robin Headlam. 'Shakespearean Comedy: Postmodern Theory and Humanist Poetics.' Michele Marrapodi ed. *Shakespeare and Renaissance Literary Theories: Anglo-Italian Transactions*. Farnham: Ashgate, 2011. 37-56.